

浮世絵版画の版権

江戸時代、書物や地本草紙には版株、版権（板株、板権と表記する方がいいか）があった。版権とは、版木を所有していることに伴う権利のことで、これがあると、重版と類版を止めさせることができる。重版とは、その刊行物と同一内容のもので、類版とは、その刊行物に類似したものをいう。

本の版権の研究はそれなりに蓄積があるが、江戸における浮世絵版画の版権についてはほとんど研究されていない。その概念をまとめると、作品の内容と判型が決定的であったようだ。

遊女絵

遊女絵の最大のものは、安永4年から天明7年（1775～87）に刊行された「雛形若菜の初模様」。磯田湖龍齋のものが140図余、鳥居清長が10図、勝川春山が2図遺存。スポンサー付き出版。版元は西村屋与八であるが、その最初期は蔦屋重三郎との共同出版であった。画面に西与と蔦重の二つの版元印が認められる12点で、様式と遊女名により、安永4年（1775）の刊行と考証される。しかし、蔦重はまもなく「雛形若菜の初模様」の出版から手を引く。

西与版の「雛形若菜の初模様」の絵師が磯田湖龍齋から鳥居清長に変わった天明3年（1783）、蔦重は再び遊女絵を刊行する（天明3年は、蔦重が吉原細見の版元株を独占し大門口から通油町への進出を果たした年である）。それは、北尾政演画「青楼名君自筆集」で、大奉書全紙判（大判2枚続の大きさ）という超大型の錦絵。それは結局、14人の遊女を描いた7図が制作された。7図のうち、画中に「青楼名君自筆集」という題名、政演の署名、蔦重の版元印などが具わっているのが2図しかない。残りの5図に題名などを入れなかった理由は、5図はばら売りせず、翌年春まで待って絵本として刊行したと思われる。

「雛形若菜の初模様」を、10年近く百数十点刊行した実績を基に、西与が吉原の遊女の錦絵の版権を主張したとしてもおかしくはない。蔦重は結局その主張に屈し、錦絵の出版を停止し、彩色摺の絵本として出版することにしたと思われる。蔦重には、吉原の遊女の彩色摺絵本として、安永5年刊『青楼美人合姿鏡』（3冊）を刊行した実績があり、それについて西与が中止を求めることは出来なかったからである。

『吉原傾城 新美人合自筆鏡』は、2種の画帖が伝存している。一つは、「吉原傾城 新美人合自筆鏡 前編完」の題簽を具え、画中に「青楼名君自筆集」という題名、政演の署名と印、蔦重の版元印などが具わっている2図に、版元印の上に「大門口」と入り、遊女の印も入れられているもの。もう一つは、題簽が「吉原傾城 新美人合自筆鏡」となり、2図の「大門口」の文字と遊女の印が削除されているものである。「大門口」と遊女印のあるものは、天明3年中に一枚物の錦絵として売り出す予定だったものの残り、それが削られているものは後版ということになる。題簽も、当初は、後編も出す意気込みで「吉原傾城 新美人合自筆鏡 前編完」としたが、それを断念した時点で、「前編完」を取って新たに作り直したと考えることができる。

蔦屋重三郎 つたやじゅうざぶろう 1750.1.7～1797.5.6

狂歌作者・書肆。名は柯理。耕書堂・薛羅館と号し、狂歌名を蔦唐丸(つたのからまる)と号す。父は尾張(知多郡か)の人丸山重助、母は江戸の人広瀬津与。寛延3年(1750)正月7日江戸新吉原に生まれた。幼時父母に離れて廓内の旧家喜多川氏(揚屋町居住の喜多川甚三郎と推定)に養われ喜多川氏を冒す。寛政9年(1797)5月6日没、48歳。墓所は東京浅草の正法寺。戒名は幽玄院義山日盛信士。少年時に廓内の書賈に勤めて江戸市中の地本問屋仲間に知己を得たものであろう。安永2年(1773)には縁家とみられる吉原五十間道の引手茶屋蔦屋次郎兵衛の軒先借りで小体ながら書賈を営み、翌3年春からは鱗形屋版吉原細見の改め及び卸小売を始めた。自家の版行は安永3年7月の遊女名寄『一目千本』が最初であるが、翌4年春には吉原の仁和賀を当てこんで遊女の提灯合印を記した『急戯(にわか)花の名寄』を出して抜目のない商才を発揮している。また、この秋には細見の株板を取得し、新趣向の細見『籬(まがき)の花』を版行し、数年の内に鱗形屋版を駆逐してしまうが、これには廓中引手茶屋仲間の応援も考えられる。安永6年には五十間道に新たに一戸を構えて書賈として独立、同6年冬には当時流行の富本節稽古本の版元となる。これより先、重三郎は佐竹家の江戸留守居役平沢平格(朋誠堂喜三二=手柄岡持)や山東京伝と親交を結び、更に大田南畝・朱楽菅江・酒上不埒(恋川春町)・森羅万象(森島中良)等の狂歌師との交りを深め、それらに係わる狂歌集や戯作を版行するようになった。一方、同業との間は老舗の鶴屋・伊賀屋・山崎屋などと結び、鱗形屋の株板を購入するなどし、天明3年(1783)9月には日本橋通油町の丸屋の跡を購って本店をここに移し、地本問屋の仲間入りをするようになり、細見株の独占をも果たし、商運は一層隆盛に赴いた。喜三二・春町・京伝らの黄表紙、南畝の狂詩本、喜多川歌麿・栄松斎長喜の遊女絵、更には天明狂歌の盛行による絵入狂歌本の出版等、そのすべてが江戸の花と持て囃され、新店ながら蔦重は江戸屈指の地本問屋となった。しかし、その繁栄も永くは続かなかった。田沼時代の終焉に次いで寛政の改革は、遊戯に根差す蔦重の商法に大きな打撃を与えた。寛政3年蔦重新版の洒落本3点の筆禍は、作者の京伝に手鎖50日、版元は身上半減の刑が申し渡された。このため蔦重は五十間道の手代店を細見卸小売の株付で売却、通油町の店の規模も人減らしなどで大幅に縮小しなければならなくなった。更に時勢の変化は資金源であった吉原の不況、出版物の不振により店の経営をかなり窮屈なものとした。曲亭馬琴、続いて十返舎一九が寄食して番頭代りに働いたのはこの頃のことである。以後の蔦重は入銀ものらしい写楽役者絵の大出版はあったものの到底昔日の俵はなくなっていた。重三郎の死後は番頭上りの婿養子勇助が二代目を嗣ぎ、以下文久元年(1861)に没した四代目まで代々蔦屋重三郎を称して家業を嗣いだが、家運の挽回は遂に成らなかった。重三郎は蔦唐丸と号して狂歌の作もあり、また、黄表紙を主体に十余の編著もあるが見るべきものはない。[向井信夫]

【参考文献】 四葩山人「蔦屋重三郎」(『高潮』明治39年3月)。○木村捨三「耕書堂蔦屋重三郎」(『浮世絵界』昭和16年8月)。○榎本雄斎『写楽』昭和44年。○今田洋三「江戸の出版資本」(『江戸町人の研究(3)』昭和49年)。○同『江戸の本屋さん』昭和52年。○鈴木俊幸「蔦屋重三郎出版書目年表稿」(『近世文芸』35・36、昭和56年12月・57年5月)。○向井信夫「蔦屋重三郎出自考」(『浮世絵聚花』付録14、昭和56年)。

岩波書店『日本古典文学大辞典』1984年、より…(一部改訂)

喜多川歌麿 きたがわうたまる ?-1806.9.20

寛政期(1789-1801)を代表する浮世絵師。早くに、狩野派の町絵師、鳥山石燕に入門し、明和7年(1770)刊の歳旦絵入俳書『ちよのはる』の挿図を一図描いているが、実質的な初作は安永4年(1775)冬刊、富本浄瑠璃正本『四十八手恋所訳』下巻表紙絵である。

第1期は安永年間(1772-81)で、習作期・研鑽期と位置づけられる。浄瑠璃本などの表紙絵、摺物、黄表紙、洒落本、噺本や絵本番付の挿絵を描く。一枚ものとしては細判役者絵や細判武者絵が数点確認されるのみである。

第2期は天明(1781-89)から寛政2年(1790)頃までで、躍進の時代と位置づけることができる。第2期における歌麿の躍進は、版元・蔦屋重三郎との二人三脚によって達成されたものである。この期の歌麿の作例は、推定も含めて、錦絵・摺物が82点、絵入版本などが55点、合計137点確認できるが、そのうち蔦屋重三郎版が91点、それ以外のは、摺物・春画と寛政初めころの錦絵や版元印のない作品であるから、天明期の歌麿の作品はほとんど蔦屋から刊行されたものと考えられる。この期の終りには歌麿のスタイルが明確に現れる。

第3期は寛政3年(1791)以降寛政末までである。寛政4年頃から同8年頃までが、絶頂期であり、その後も次々に様式を変え、美人画界の第一人者の地位を保つが、次第に硬直化・固定化の傾向を見せはじめる。第3期の前期、すなわち絶頂期の画業で第一に挙げるべきは、美人大首絵の創始とその確立である。濃艶な色香、女体の質感描写、表情やしぐさに表れた微妙な心の驀の描出に傑出した力量を示し、歌麿は女絵師の頂点に立つ。女性の全身図のシリーズにも多くの傑作を残し、それには女性の姿態美が余すところなく表現されている。第3期の後期は、新分野への挑戦と、人気・評価の高まりからくる驕りとが微妙に交差する複雑な時期である。

享和元年(1801)から没する文化3年までが、第4期である。この期の歌麿は濫作からくる画技の衰えを強調されることが多いが、観相物などいくつかの作品に新味を見せているのは特記されてよいであろう。歌麿は文化元年5月に手鎖の刑に処せられ、その2年後に約50年の生涯を閉じる。

東洲斎写楽 どうじゅうさいしゃらく 1763-1820.3.7

1 写楽の版画作品は全部で145図

- 第1期 役者大首絵 28図……寛政6年(1794)5月の江戸3座の芝居に取材
- 第2期 役者全身図 38図……寛政6年7、8月の江戸3座の芝居に取材
- 第3期 役者大首絵 11図……寛政6年11、閏11月の江戸3座の芝居に取材
- 役者全身図 47図……寛政6年11、閏11月の江戸3座の芝居に取材
- 役者追善絵 2図……寛政6年10月19日に亡くなった市川門之助追善相撲絵 4図……寛政6年11月の回向院の勧進相撲に取材
- 第4期 役者全身図 10図……寛政7年(1795)1月の江戸2座の芝居に取材
- 相撲絵 2図……寛政7年(1795)1月売出しとして制作
- 第3期または4期 武者絵 2図、福神図 1図

2 写楽の役者絵の成立事情……写楽の役者絵の成立事情を解き明かすキーワード

◎入銀物 入銀物(スポンサー付出版)か一般売商品かあるいはその両方か

◎事前制作 初日前に制作したか、舞台を見ての制作か、あるいはその両方が混在か

◎蔦重の野望と写楽の身分

現役能役者としての斎藤十郎兵衛＝写楽は、当時 32 歳の徳島藩士

◎蔦屋重三郎の目的

磯田湖龍齋 いそだこりゅうさい 1735～？ 作画期：1770 頃～没年

安永・天明期を中心に活躍した浮世絵師。春信門人と推定される。安永期になると春信様式から離れ、肉感的な美人画様式に移行し美人画の第一人者として活躍、天明 2 年頃まで夥しい数の錦絵を刊行。代表作に「雛形若菜の初模様」がある。天明 2 年に法橋位を得てからは肉筆画制作を画業の中心に据える。天明末から寛政末頃没か。

鳥居清長 とりいきよなが 1752～1815、作画期：1767～没年

鳥居清満門人、鳥居家四代目当主。天明期（一七八一～八九）を代表する美人絵師。伸びやかで健康的で、生命力に溢れる八頭身美人を描いて一世を風靡した。群像表現も巧みで、出語り図も創出した。天明七年頃、鳥居家を継いで絵看板中心となり、次第に錦絵から遠ざかる。

北尾政演 きたおまさのぶ 1761～1816、作画期：1778～没年頃

北尾重政門人。戯作者・山東京伝の絵師名。天明期には絵師として活動するが、寛政以降は戯作が中心。

北尾政美 きたおまさよし 1764～1824、作画期：1778～没年頃

北尾重政門人。寛政 6 年に津山藩の御用絵師となり、鋏形紹真と改名。北齋に先駆けて鳥瞰図法を用いた風景画を開拓、さらに、略画や戯画にも才能を発揮した。

葛飾北齋 かつしかほくさい 1760～1849、作画期：1779～1849

「壬生狂言」 小判揃物 14 図以上 寛政 2 年

（青楼俄絵） 小判錦絵 13 図以上 寛政 3 年

栄松齋長喜 えいしょうさいちょうき ?～? 作画期：1789～1809 頃

蔦屋重三郎と鶴屋喜右衛門版が多い

四季の美人、青楼美人合

大坂新町太夫シリーズ、大坂新町芸子・仲居シリーズ、その他続絵など

歌川豊国 うたがわとよくに 1769～1825 作画期：1786 頃～没年

窪俊満 くぼしゅんまん 1757～1820 作画期：1776 頃～没年